

加藤家住宅実測調査報告

“KATO’S HOUSE” ACTUAL MEASUREMENT SURVEY AND REPORT

大川 三雄¹, ○江夏 隆弘²
Mitsuo Ohkawa¹,*Takahiro Kouka²

Abstract: The purpose of this report is to explain a results of actual measurements and interviews about “Kato’s house”, which is located in Denenchofu and a designated cultural property. They were conducted during its demolishing. As the result, below mentioned three points about Kato’s house become clear.

1. “Chanoma” locates in the middle of room layout. The centerpiece, Chanoma, gets the house family-oriented.
2. The architectural style of Kato’s house compromises between East and West.
3. Kato’s house success to become a functionable, compact and smart house owing to many uses of leading-edge home electronic appliances, which are mainly found in the kitchen space.

1. はじめに

本稿では田園調布に位置し、登録文化財である加藤家の解体に際して行った実測調査および聞き取り調査の結果を報告する。

2. 加藤家の概要

所在地 : 大田区田園調布 3-45-19

区画番号 : 504

建築年代 : 大正 13 年.

昭和 40 年代と昭和 58 年に大きな改造.

構造 : 木造, 和小屋, 平屋建.

昭和 58 年に 2 階部分を増築.

屋根 : 寄棟, 一部切妻, スレート葺

外壁 : 南京下見板張り

設計・施工 : 大工.

2 階増築 (昭和 58 年) は一高建設.

指定 : 国指定登録文化財

解体 : 平成 27 年 7 月 6 日より解体

3. 建設の背景

加藤家住宅は、加藤正雄、きくえ御夫妻が大正 13 年に建てた住宅である。正雄さんは仕事でヨーロッパに行かれたこともあり、東京女子大学出身のきくえ夫人ともどもモダンな生活への関心が高いご夫婦であった。加藤正雄さんの長男である加藤和雄さんは凸版印刷や日版と関係の深い印刷機材の製造を仕事にされていた技術者で、現在のご当主である加藤信雄さんの父親にあたる。加藤家住宅は正雄さん、和雄さん、信雄さんの 3 代にわたって住み続けられてきた住宅であった。

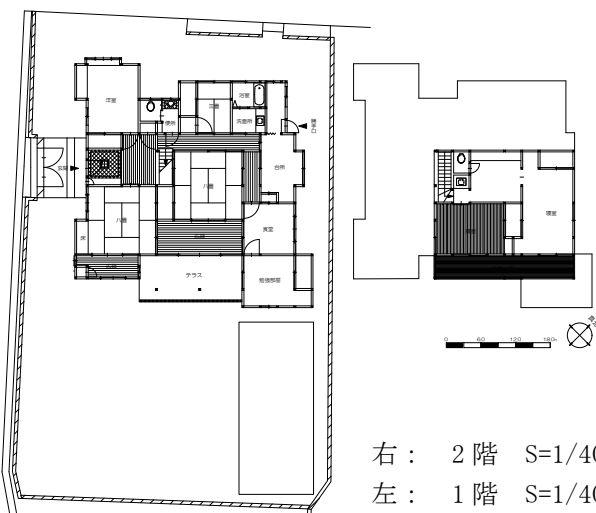
4. 外観の特徴

加藤家住宅は、南京下見板張りに白いペンキを塗った外壁と急勾配のスレート屋根が印象的ないわゆる“文化住宅”である。外壁の一部は、南京下見板が袴状に広がった特徴ある張り方で、角の部分は小口をみせず“留め”に収めている。当初の屋根は寄棟で、北東側の 6 畳間の上と、庭側の洋間の部分に切妻屋根を載せた形式であったが、昭和 58 年 5 月に 2 階が増設されたことで、屋根形状は大きく変えられていた。

5. 改造について

玄関の南側には洋風応接間、西側に 6 畳の日本間がある。2 室共に接客用の部屋として作られたが、昭和 20 年代に、洋風応接間は日本間に、また日本間は洋間に作り替えられている。和雄さんが当主となられた昭和 40 年代には 3 畳 (女中室) と浴室が改造された。また、現在の当主である加藤信雄さんが結婚されたのを機に、新婚 2 人の部屋として昭和 58 年 5 月に 2 階を増築、施工を担当したのは「一高建設」である。

また後年、庭の一角に離れの借家が建てられた。



右 : 2 階 S=1/400

左 : 1 階 S=1/400

6. 各部詳細

6-1. 玄関と玄関ホール

玄関及びホールの天井と壁は漆喰仕上げで、腰壁は板張り、土間には幾何学模様の装飾タイルが敷かれ、腰掛を兼ねた低めの下駄箱が設けられており、機能性と美しさを兼ねた空間である。

6-2. 6 畳間（日本間から洋間へ）

北西側の 6 畳間は、竣工時は日本間であったが早い時期に洋間に変えられている。その折に、西側の壁に矩形の窓（幾何学模様の入ったガラス戸と雨戸）が設置され、北側には出窓が増設された。床の間として造られた部分には、洋風応接室の方であったと思われる木製の飾り棚が設置されていた。

6-3. 応接間（洋間から日本間へ）

南側の庭に面する応接間は、竣工時は洋室として作られたが、後に和室に改造された部屋である。その折に庭に面した板敷の縁側が 45 センチほど広げられ、また、南西の壁側に床の間に設けられた。

6-4. 8 畳間（茶の間）

この住宅の中心に位置する部屋である。畳敷き、棹縁天井で長押付。庭側には、20 センチの段差をおいて一間幅の板敷の広縁が設けられている。広縁の天井は格天井の仕上げが施されていることから、茶の間と一体となった洋間としての使用が可能で、“茶の間+広縁”が家の中心として位置づけられていたことが判る。20 センチの段差はイスザとユカザの融合が意図され、さらに外部のパーゴラへと続く家族団欒の装置となっていたことが伺える。

6-5. 食堂及び台所

食堂は 4 畳半の大きさで床は板敷き、天井と壁は漆喰仕上げとなっている。食堂と台所の境には両面ハッチが設けられている。ハッチの脇には天板にタイルを張った「鈴木商工」製の木製のガス台が置かれている。日本における初期のシステムキッチンを提案した会社である。最新の家電機器を使用することで、コンパクトで使いやすいキッチンにまとめ上げられている。

6-6. 洋間（勉強部屋）と 3 畳間（女中室）

約 4.5 畳大の洋間には幅一間、奥行き半間の押入れと、半間幅で開き戸付の収納と棚がついている。床は板張り、壁にも板張りの腰壁がつく。部屋の南角に手洗いの設備がついているのは、この部屋からパーゴラを経て外の庭に繋がっているからである。

3 畳間は女中室とも言われていたが、女中さんを雇い入れたことはなく、もっぱら予備室として使われていた。

7. まとめ

田園調布に残る大正末期の希少な住宅遺産であった。白ペンキ塗りの下見板張りの壁面、急勾配のスレート屋根という文化住宅の外観をもちながら、内部は畳敷きの茶の間を中心とした家族中心の住まいである。一方、食堂や広縁では椅子を使うなど和洋折衷が試みられるなど、融通性のある日本間と機能的な洋間の組み合わせがなされている。また台所を中心に最先端の家電製品を多用することで、コンパクトで機能的な使い勝手の良い住まいを実現していた。90 年の永きにわたり、それが 3 世代の家族によって、増改築を繰り返しながら使い続けられてきた大きな理由である。所有者の止むを得ない理由があったとはいえ、解体されたことはまことに残念である。



上 : 外観

下 : 茶の間

上 : 玄関

下 : 台所

8. 調査日および調査員

調査日 : 平成 27 年 7 月 5 日 (火)

調査員 : 大川 三雄 (日本大学理工学部特任教授)
／調査員代表

勝原 基貴 (日本大学大学院博士課程)
／統括責任、図面作成

江夏 隆弘 (日本大学大学院修士課程)
／実測責任、図面作成

竹田 実紅 (日本大学 4 年生) / 調査員

正田 竜平 (日本大学 4 年生) / 調査員

大木 裕登 (日本大学 4 年生) / 調査員

写真撮影 : 須藤 史朗 (須藤写真事務所)

調査補助 : 山本たか子 (大田区教育委員会 文化財担当)